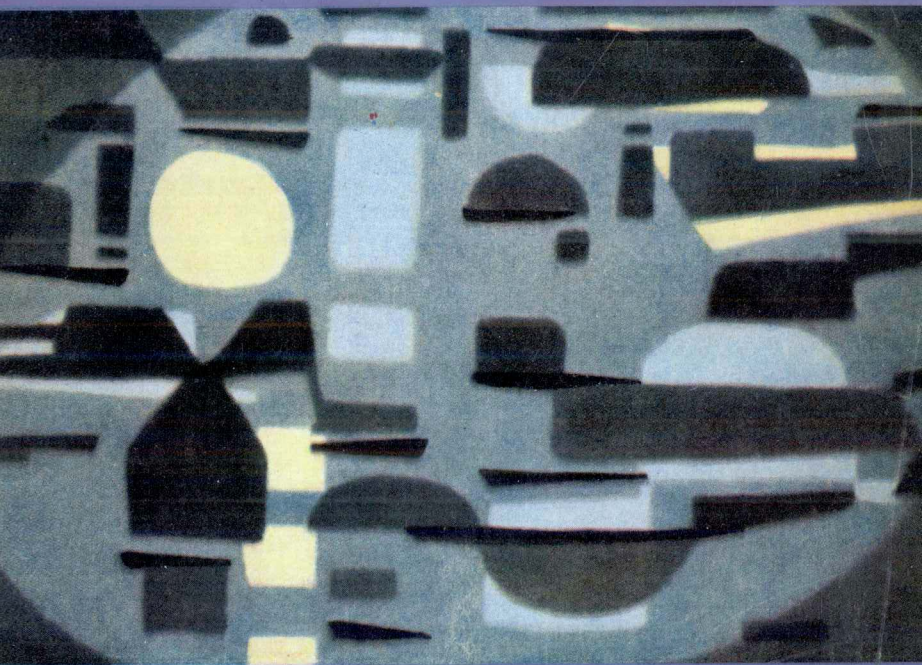


ALEXANDRE DUMAS



LE COMTE DE MONTE-CRISTO

SHINCHOSHA

モンテ・クリスト伯

Ⅱ

アレクサンドル・デュマ

山内義雄 譯

新版世界文學全集

4

新潮社 版

新版世界文学全集 4

モンテ・クリスト伯 II

昭和三十三年四月三十日 発行
昭和三十三年六月十日 二刷

定価 参百五拾円

地方
売価 参百六拾円

訳者 山内義雄

発行者 佐藤義夫
東京都新宿区矢来町七一

発行者 株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一

電話東京 〇七一一一〜九番
振替東京 八〇八番

乱丁・落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷 扶桑印刷株式会社
製本 新宿 加藤製本所

目次

三九	賓客		七
四〇	午餐會		二六
四一	紹介		三六
四二	ベルツツチオ		五二
四三	オートイユの家		五五
四四	復讐		六三
四五	血しぶき		六八
四六	無制限貸出		六九
四七	連錢草毛		一〇七
四八	観念論		一八
四九	エデ		一三〇
五〇	モレル一家		一三五
五一	ピラムスとティスベ		一四四
五二	毒物學		一五五

五三	「ロベール・ル・ディアブル」……………	一七
五四	株の高低……………	一八
五五	カヴァルカンティ少佐……………	一九
五六	アンドレア・カヴァルカンティ……………	二〇
五七	うまごやしの囲い地……………	二九
五八	ノワルティエ・ド・ヴィルフォール氏……………	三〇
五九	遺言……………	三六
六〇	信号機……………	四八
六一	桃をかじる山鼠から園芸家をまもる方法……………	五五
六二	幽霊……………	五五
六三	晩餐……………	五七
六四	乞食……………	五八
六五	家庭争議……………	五九
六六	結婚政策……………	六〇
六七	検事総長室……………	六一
六八	夏の舞踏会……………	六二

六九	情	報	三三
七〇	舞踏會	三四	
七一	パンと塩	三五〇	
七二	サン・メラン侯爵夫人	三五四	
七三	約東	三五六	
七四	ヴィルフォール家の墓所	三九五	
七五	覚え書	四〇五	
七六	アンドレア・カヴァルカンティの売り出し	四一七	

モンテ・クリスト伯
Ⅱ

三九 賓 客

アルベール・ド・モルセールが、モンテ・クリスト伯爵に向かつて、ローマでお待ち受けしようといったエルデ町の家では、五月二十一日の午前中、その約束をりっぱに果たすため、すべての用意がととのえられていた。

アルベールは、広い中庭の隅にあつて、僕婢の住居となつてゐる建物と向かい合つた離れに住んでいた。その離れの窓は、二つだけが町に面しており、他の三つは中庭へ向かい、二つは反対に庭園へ向かつて開いてゐた。

この中庭と庭園とのあいだに、モルセール伯爵夫妻の当世ふうな広大な住居が、悪趣味な帝政時代の建てかたで建てられていた。屋敷の、町に面したほうは、端から端まで、ところどころ花を植えた鉢を載せた塀が高くそびえ、その塀は真中のあたりで、金色に塗つた槍の穂のついた大きな鉄門で切れてゐた。これが正面だった。べつに、門番小屋につけられてゐるような小さな門があつて、これは、邸のあるじたちや召使たちが、徒歩で出入りするときの通用門にあてられてゐた。

アルベールの住居として、こうした離れがあてがわれていたことから、そこには、わが子と離れたくはないが、さ

りとて子爵くらいの年輩の青年には完全な自由を与えなければならぬことを理解してゐる母親の、そのやさしい心づかいがうかがわれた。だが一ぼうでは、これもちよつと言つておかなければならぬことだが、きれいに塗つた籠に入れた小鳥とでもいったような、そうした自由な、また無為な生活にあこがれる家付息子の、聰明な利己主義のかげも認められないわけではなかつた。

町に面した二つの窓をとおして、アルベールは外を通る者を見ることのできた。外をながめることは、いつも自分の視界を横ぎつてゆく人たちを見ていたいという、青年たちにとつてじつに欠くべからざることにほかならなかつた。たとい視界が町でさえぎられていたところで、そんなことはすこしもかまわない。そして、こうやって眼をくばつてゐるうち、もつと綿密な観察を下す価値のありそうなものが見えろと、アルベールは、門番小屋のわきにある門に並んだ小さい戸口から出て行つて、周到な探索をつづけられるというわけだった。いま、この戸口について、とくに説明しておこう。

それは、この屋敷が建てられた日以来、みんなから忘れられていたというような、そのまま永久に閉ざされたままといったような小さな開き戸だった。それは、まったく人目につかず、埃にまみれてゐたが、錠前や蝶つがいに丹念に油がひかれてゐるところから見ても、この戸が絶えずひそかに使われていることがうかがわれた。この小さい戸は、他の二つの門と対立した関係に立つてゐた。そして、『アラ

ピヤン・ナイト』にある有名な洞窟の扉のように、アリババのふしぎな《胡麻よ、ひらけ》（門をひらく）のように、このうえなくやさしい声の呪文が聞え、或いはしなやかな指先で叩かれるとひとりで開くという、いわば門番の監視の眼をよそに、さも門番の存在をあざわらってでもいるようなものなのだった。

この小さな戸口からはいると、広い、しずかな廊下があり、それがつまり控室で、そのはずれの右手には中庭に臨むアルペールの食堂、左手には庭園に臨んだ彼の小さな客間があった。植えこみとか蔓草の類が、窓の前に扇形にひろがっていて、それがぶしつけな人の眼によって覗きこまれるおそれのある、一階の、ただ二室だけから成っているその内部を、中庭と庭園とからかくしていた。

二階には、やはり下と同じような室が二つあり、そのほかに、下の控室の上がも、一つづつな室になっていた。その三つの室とは、すなわち客間と寝室と居間だった。階下の客間は、喫煙者にあてられたアルジェリヤふうの大きな布団椅子の室、とでもいったほうがよかった。二階の居間は寝室に通じていた。そして、目につかないような戸口から階段に出られるようになっていた。こういうふうな、そこには、いかにも慎重な注意が払われていたかがわかるのだ。

この二階の上は、壁や仕切りを取り払ってひろげられたアトリエになっていた。そこでは芸術家としての彼と、道楽者としての彼とが、互いにきそいあっていた。そこにしまわれ、積み重ねられていたものは、アルペールが次から次

へとうつり変ってゆく気まぐれにまかせて手に入れたもので、狩のラッパもあれば、バス、笛のたぐいもあり、管絃樂の道具一式が揃っていた。それらは、アルペールが、一時音楽にたいして、趣味というか、むしろ道楽を持っていたからのことだった。画架も、パレットも、バステルもあった。というのは、音楽にたいする道楽につづいて、絵にこつたこともあるからだ。それから、フェンシングのフルール（稽古）、拳闘用のグローヴ、木刀、それに杖がいる。これは当時の青年の誰もがやっていたように、彼もまた、絵や音楽などの場合とくらべものにならないほどの熱心さで、武士的教育を完成するに必要な三つの術、すなわち、剣道、拳闘、棒術にこつたことがあるからだ。そして、体の鍛錬のためにと設けられたこの室には、かつてはグリジェ、クックス、シャルル・ルヴウシェーといったような人々を迎えたこともあったのだ。

この特別な室のなかにあるそのほかのものはといえば、フランソワ一世時代の古い長持。その中は、中国の磁器、日本の花瓶、ルッカ・デ・ラ・ロビアの陶器、ベルナルド・パリッシーの皿などで一ぱいだった。またアンリー四世、或いはシュリ、ルイ十三世、あるいはリシェリウといった人々が腰をかけたこともあるかと思われる昔の脇掛椅子もあった。というのは、その椅子の二つには、紺青の地にフランスの三つの百合の花が輝いており、その上に王冠のついた紋章が刻まれていたからで、明らかに、ルーヴル宮の道具庫か、少くともどこかの王宮の庫から出たもの

にちがいがなかった。くすんだ、いかつい布地の椅子の上には、ベルジャの日の色で染められたか、乃至カルカッタ、ジャンデルナゴールの女の指さきで織られたとでもいったような鮮やかな色をした、ぜいたくな布地がむずろくに投げかけられていた。そうした布地がなんのためにそこにあるのか、それは誰にも言えないだろう。それらは、人の目を楽しませながら、その持主にもまだわからないこれから先の行末を待っているのだった。そして、それまでのあいだ、艶々しい、きらびやかな輝きで、室を明るくしているというわけだった。

いちばん人目を惹きやすいところには、ロレー・エ・ブランシェーの作になる紅木のピアノが一台置かれていた。それは、小人島の客間とでもいったような、わが国の小さな客間にしっくり釣合ったものだった。それでいながら、この狭い、響きのいいピアノの箱は、そのなかにりっぱにオーケストラを響き出させることもでき、ベートーヴェン、ウエーバー、モーツァルト、ハイドン、グレトリー、ボルボラ(すべて有名作曲家)などの傑作の重みに呻きを立てることもできるのだった。

それから、或いは壁にそい、或いは扉の上、或いは天井に、剣、短剣、クリック鉄槌とか、或いは金色に塗られ、象嵌を施した甲冑、植物の標本、鉱石、或いは不動の飛翔をするために、炎のような色をした両翼をひろげ、開いたまま閉じることのない嘴を見せている剣製の鳥などが見られていた。

これが、とりわけ、アルベールの氣に入りの室だったことは言うまでもない。しかし、青年は、約束のその日には、通常礼服を身につけ、階下の小さい客間に陣どっていた。そこには、幅の広い、つくらした寝椅子で遠くから囲まれたテーブルの上に、およそ名の知れた煙草という煙草、ペチュルブルグの黄煙草から、メリーランド、ポルト・リコ、ラタキエ、シナイの黒煙草にいたるまでが、オランダ人が愛玩するひび焼の陶器の器のなかに輝いていた。そのそばには、香木の函のなかに、大きさと品質の順にしたがって、ブーロ、レガリア、ハヴァナ、マニラの類が並べられ、扉の開けてある戸棚のなかには、さまざまなドイツ煙管、琥珀の口を付け、珊瑚で飾られたチブーク(トルコ)、蛇のうりに巻いた羊皮紙の長い管を持ち、象嵌の施されたナルギレ(管)などがずらりと列べられ、喫煙者が来て、氣の向くままにそれを手にし、それを喫んでくれるのを待っていた。こうした整頓、というより調和の取れた乱雑さ、それはアルベールみずからの采配によるものだった。近ごろの午餐の客は、コーヒーをすすった後で、わが口を洩れ、長い気ままな輪をかいて天井に上って行く煙を透して、そうしたものをながめるのが好きなのだった。

十時十五分前になると、一人の下僕がはいって来た。ジョンという名で呼ばれることになっていて、英語しか話さず、アルベールにとってただ一人の、十六になる給仕だった。もっとも普通の日には、母家の料理番を使うこともでき、催しごとでもあるときには、父の伯爵の召使を使

うこともできた。

ジェルマンという名の、若い主人の信用を一身に集めていたこの下僕は、一束の新聞を持ってきてテーブルの上に置き、そして、一束の手紙をアルベールに渡した。

アルベールはこのさまざまな手紙を気もなさそうに見ていったが、そのなかから、やさしい筆蹟の、香りゆかしい封筒にはいったぶんを一通選り出し、封を切って、さも心惹かれてもしたようすで読み下した。

「この手紙はどうやってきたんだね？」と彼はたずねた。

「一通は郵便でまいりましたが、一通はダングラール夫人の下僕が持ってまいりました。」

「ダングラール夫人に、機敷に御招待いただきましたが、喜んでお受けいたします、とお伝えするように言ってもらおう……ああ、ちよいと待った……今日、昼間のうちにローザのところへいってね、お招きにしたがい、オペラの帰りにごいっしょに夜食をいたします、と言って欲しい。キプロス、ヘレス、マラガの葡萄酒を取りまて六本、それにオスタンドの牡蠣かきを一樽届けておくん……牡蠣は、ボレルのところから持っていくがいい、わたしが食べるんだからと念をおしてな。」

「お食事は何時ごろにいたしましょう？」

「いま、何時だね？」

「十時十五分前でございます。」

「そうか！ 十時半き、つちに食べさせてくれ。ドブレーは、役所にいなくてはならないだろう……それに（アル

ベールは、手帳を調べてみた。）五月二十一日、午前十時半、そうだ、たしかにその時間だ。大してあてにはしていないが、自分だけは正確でありたい。ところで、お母さまはお目覚めだったろうか？」

「見てまいりましょうか？」

「うむ……リキエールをくださるようお願いしてくれ、僕のところのは揃っていないから。そして三時ごろ、お居間へ伺って、さる人を御紹介申しあげたいとお伝えしてくれ。」

下僕は出ていった。アルベールは寝椅子の上に体を投げ出し、二三の新聞の封を切り、演芸欄を見ていたが、バレエでなく、オペラをやっているのがわかると顔をしかめた。つづいて、人から聞いた歯磨の広告を化粧品品の広告欄にさがしてみたが、それはどうしてもみつからなかった。彼は、これらバリでもっとも読まれている三枚の新聞を次から次へと投げ捨てたあとで、ああ、と一つ大きなあくびをしてからつぶやいた。

「まったく新聞ときたらだんだんくだらなくなつて来るな。」

このとき、一台の小型の馬車が門前に止まった。しばらくすると、下僕はふたたび室にはいってきて、リュシアン・ドブレー氏の来訪を知らせた。背のすなりとしたブロンドの髪をした青年、顔色は青白く、落ちつきのある灰色の目、唇は薄く、冷やかで、身には彫のある金ボタンのついた紺の燕尾服を着け、襟飾は白、絹紐でつるした鱗甲縁の片眼

鏡、それを時折、眉と頬骨の筋肉を動かしては、右の目の
凹みにはめるのだった。彼は、微笑もせず、黙ったまま、
なかば儀式張った態度ではいつてきた。

「やあ、ドブレ……きたな！」と、アルベールは言った。

「あまり時間とおりでびっくりした！ まったくもって正
確だ！ いちばんおそく来ることを思っていたのに、十時
十五分前にきたんだから。しかも約束の時間は十時半だ！
奇蹟だね！ 内閣が互解でもしたんじゃないのか？」

「いや、」と、青年は長椅子のなかに体を埋めて、「安心し
たまえ、いつもぐらついてはいるが、引っくり返りもしな
いんだから。半島(イソ)事件も、完全にわれらの地歩を固
めてくれることになろうし、永久、辞職のおそれもなさそ
うに思えて出してる。」

「そうそう、カルロス(スベイ)をスペインから追放しよう
というわけだったな？」

「そうじゃない。混同してくれては困るんだ。われわれは、
カルロスをフランスの国境の向こう側から(スベイ)連れ戻
してやろうと思ってるんだ。そして、ブルジュで、王者
の待遇を与えてやろうというわけなんだ。」

「ブルジュって？」

「そうさ、カルロスだってとかかくは言えまい！ ブール
ジュは、シャルル七世のときの首府なんだ。え！ 君はそ
れを知らずにいたのか？ 昨日から、パリ中は大さわぎだ。
それに、このことは一昨日取引所にまで洩れてしまった。
というわけは、ダングラール氏が——どうも僕には、あの

人が、いつもどんな手段でわれわれと同時に事実を嗅ぎつ
けるんだかわからないが——あの人が買方にまわって百万
フラン儲けたのさ。」

「そして、君はどうやら、新しい勲章を手に入れたらしい
な。ブローチ(勲章)に、青い綬が一つふえたな。」

「うん！ シャルル三世大勲章をもらった。」と、ドブレ
は、なんでもないことのようにそれに答えた。

「どこを風が吹くといったような顔をするなよ。嬉しいと
言えよ。」

「やっぱり嬉しいとでもいっておくかな。装飾品として
は、ボタンがけの黒燕尾服に、大勲章も悪くないから。あ
れは粹(い)でね。」

「それに、」と、ほほえみながらアルベールが言った。「ブ
リンス・オブ・ウェールズがライヒシュタット公とでもい
ったように見えるからな。」

「ところで、僕がなぜ早くやってきたのか、わかったらう
な？」

「シャルル三世大勲章をもらったからかい、その吉報を知
らせたかと思ってるのかい？」

「いや、發送事務で徹夜をしたからだ。外交電報が二十五
本。今朝、しらじら明けに家に帰って寝ようとしたが、頭
が痛んでたまらない。起きあがって一時間ばかり馬に乗っ
た。ところが、ブローニユの森へいくと、疲労と空腹で
なんとしてもやりきれない。この二つの大敵は、いっしょ
にやってくることはめったにないが、今日という今日、そ

の二つが同盟して攻め寄せてきたというわけなんだ。つまり、カルロス党と共和党との同盟軍というやつだな。ふと頭に浮かんだのは、今朝君のところに御馳走のあるということだった。で、ごらんのとおりやってきた。腹がすいてる。なにか食べさせてもらえないかな。それに、ぐさぐさしてやりきれない。なにか面白い話を聞かせてもらおう。」

「それは主人役としての僕の義務だが。」と、アルベールは下僕を呼ばうと鈴を鳴らしながら言った。リュシアンは、トルコ石のはまった金の握りのステッキの先で、ひろげられた新聞をはねとばしていた。

「ジェルマン、ヘレスを一杯とビスケッットを持ってきてくれ。ところで、それまでのつなぎに、リュシアン、もちろん密輸入品だここに葉巻がある。ちょっと喫って見たうで、君のところの大臣に、あんなくすみ、の葉みたいなのをいやおうなしに国民に吸わせたりしないで、こうしたやつを売るようにとすすめて欲しいな。」

「じふ、だんじやない！ そんなことはまっぴらごめんだ。政府の手から出たものだ、なんでも悪口を言うんだからな。なんでもまずいときめてやがる。それに、このことは内務畑の仕事じゃない。大蔵省の関係だ、関税課のユーマン氏にでも言うんだな。省内甲廊下、二十六号室。」

「これはこれは、」と、アルベールが言った。「驚いた、何から何まで御承知なんだ。それはそうと、葉巻はどうだ？」

「ああ！」と、ドブレーは、めづきの燭台に燃えている赤い蠟燭から、マニラ葉巻に火をうつすと、布団椅子の上に

そり返って、「ああ、予爵、何もすることのないという君は幸福だな！ じっさい、君は君自身の幸福を知っていないだ！」

「わが親愛なる王国の平定者、」と、アルベールは軽い皮肉を浮かべながら言った。「君にして、これまで何もしなかったと言ったのなら、これからいったい何をするつもりだ？ ええ！ 大臣秘書官として、ヨーロッパの大きな陰謀のなかへ飛びこむかと思えば、パリでの小さないざこざのなかにも顔を出す。保護してあげべき王さまがたがおいでになり、糾合すべき政党があり、采配をふるうべき選挙があり、ナポレオンが剣と勝利で戦場を左右した以上に、ペンと電報とで内閣を自由にしている。職務にたいする俸給以外に、二万五千リーヴルからの年収を持ち、シャトー・ルノーが四百リーヴル出すと言っても手放さなかった馬を持ち、ズボンの仕立にかけてはやりそこなったことのない仕立屋を持ち、そのほか、オペラがあり、ジョッキークラブがあり、ヴァリエテ座があるときている。それでも君は、おもしろくないと文句をいうのか？ いいき、では僕がおもしろい目にあわせてやるから。」

「どういうふうだね？」

「新しい人物を紹介してさ。」

「男か、女か？」

「男だ。」

「なんだ男か！ 男だったらいやというほどお近づきがあ

らあね！」

「だが、それは僕の言うような人とはちがうぜ。」

「どこの男だ？ 世界のはてからでもくるような男か？」

「おそらくもつと遠くから。」

「ふん！ だからといって、まさかその男が、われらの午餐を持ってくるわけでもないんだらう？」

「そこところはだいじょうぶ、安心したまえ、午餐は母の台所のほうで支度させてる。そんなに腹がすいたのかね？」

「うむ、打ちあけて言うのはきまり悪いが、じつのところそうなんだ。昨日ヴィルフォール氏のところで晩餐食べたが、君の考えはどうか知らんが、裁判所の連中の晩餐ときたら、なんとまたまらないほどけっこうなやつだね。あの連中、まるで心にとがめるところがあるとしてもいうようなんだ。」

「ふん！ よその家の晩餐を、けなしたければけなすがいいや。どうせ大臣連のところ、けっこうな食事をしていくこつたろうし。」

「とんでもない。少くとも、われわれのところへくる客ときたら、ちゃんとした連中なんかないんでね。やむをえずに御機嫌をとったり、とりわけ、こちらへ投票させるためのものでなければ、大臣のところでの晩餐なんかまっぴらごめんだ。」

「では、君、ヘレスをもう一杯、それにビスケットをもう一つ。」

「ありがとう、君のところのスペイン葡萄酒はじつにうまいな。あの国を、平和にしてやったということが、いかにむづかだったかということがわかるだらう。」

「うむ、だが、ドン・カルロス（スペイン王シャルル四世の第二子フェルジナンド七世の弟、一七八八―一八五五）は？」

「なにあに、ドン・カルロスは、ボルドーの葡萄酒を飲んでりゃいい。そして、十年もしたら、あれの息子をちよつとした公爵の娘とでも結婚させるさ。」

「そうなれば、もし君がそのころまで役所づとめをしていたんだつたら、さしずめトワゾン・ドール（金毛熊章）ということだな。」

「ところでアルベール、君は今朝、煙の御馳走で腹をこしらえさせようっていうわけかね？」

「そうなんだ。それがいちばん胃袋を楽しませてくれるっていうわけなんだ。ちよつと待った、次の間にボーシャン君の声がする。二人で議論をしてみろよ。きつとがまんができるだらうぜ。」

「なんの議論だ？」

「新聞のことでも。」

「おい、君、」と、ドブレーは、このうえもない侮蔑の色をみせながら言った。「この僕が、新聞なんか読んでると思うのか！」

「それならなおさらけつこうだ、さらに議論が榮えようというもんだ。」

「ボーシャンさまのお出ででございます。」と、下僕が知ら

せた。

「さあさあ、どうか。あたるべからざる健筆家！」アルベールは立ちあがって、客を迎えに立っていった。「君、ドブレー君はね、少くも御本人の言葉によると、君の書いたものなぞ読みもしないで、しかも君が嫌いだったさ。」

「もつともだな。」と、ボーシャンが言った。「それは、この僕にしたって同じことさ。僕のほうでも、この人のしていることなぞ知りもしないで、一途に非難してるんだし。やあ、今日は勲二等君。」

「おや、もうそれを知ってるのか。」と、秘書官は、握手と微笑をかわしながら言った。

「知ってるともさ！」と、ボーシャンが言った。

「で、世間じゃなんて言ってるね？」

「どこの世間さ？ この一八三八年代には、いろいろな世間があるんだからな。」

「君が、その音頭取りの一人である厳正批判派の世間でさ。」

「きわめてとうぜんだといってるさ。ずいぶん赤い血を流させたあとだし、少しは青(勲二等の綬が青であるところから言った皮肉)もよからうって。」

「おいおい、お手やわらかに願いますぜ。」と、ドブレーが言った。「ボーシャン君、君はなぜわが党にならないんだ？ 君くらいの才能があれば、三四年もするうちに一財産できるが。」

「だから、僕も君の意見に従いたいと思って、唯一つのも

のだけを待ってるんだ。つまり六ヵ月は寿命のつくことのたしかな内閣をね。ところで、ちょっとおたずねしたいが、つまり、ドブレーを安心させてやりたいからのことなんだが、いったいわれわれは、午餐を食べさせてもらえるのかね？ それとも晚餐を食べるのかね？ 僕は議会に行かなければならないんだから。わかるだろうが、僕らの稼業は、なかなか薔薇色とはいかない(楽にはいかないの意)んでね。」

「もちろん午餐さ。もう二人だけ待てばいいんだ。その人たちがきたら、すぐにはじめる。」

「で、午餐に待ってるその人は、どういう種類の人なんだね？」と、ドブレーが言った。

「貴族が一人と、外交家が一人。」とアルベールが答えた。「では、貴族のほうにかれ、これ二時間、外交家のほうにたづふり、二時間は待たされるな。僕は、デザートのころに帰って来ようや。苺と、コーヒーと、葉巻を残しといてもらおう。議会でカツレツでも食って来ようや。」

「そんなことの必要はないさ。ボーシャン君。たとい、その貴族というのが、モンモランシーのような人だつても、またその外交官がメッテルニッヒのような人だつても、きっかり十時半には食事にするから。それまでの間、ドブレーのように、ヘレスを飲んで、ビスケットでも食っているよ。」

「そうか、ではいるかな。今朝は、なんとしても鬱した気持を晴らさなくっちゃあ。」

「ははあ、君もドブレーと同じだな！ 内閣がふさぎこん